

『詩經』圖解本の變遷

——宋から明初まで——

原 田 信

はじめに

筆者は先に、現存する早期の『詩經』圖解の一つである南宋の建安書肆刻本『纂圖互註毛詩』卷頭の附録「毛詩舉要圖」を對象として、『詩經』の圖解がどのように利用され、『詩經』の註釋としてどのような意義をもっていたのか、という問題を考察し、次の二つの點を指摘した。

一つは、南宋時に書肆が刊刻した『詩經』圖解は、一般的に科擧受験の參考書として利用されながら『詩經』の考證にも用いられていたという點、そしてもう一つは、書肆は楊甲「毛詩正變指南圖」をもとに「毛詩舉要圖」を編纂し、その後、「毛詩舉要圖」は多くの『詩經』圖解の原型となった點である。⁽¹⁾

特に後者の、南宋の『詩經』圖解が後世の圖解の原型となつたという點は、南宋より後の『詩經』圖解の繼承や影響關係を明らかにする上で重要な事象だと考えられる。しかし、先の考察では「毛詩舉要圖」を中心に、「毛詩正變指南圖」および元代以降の圖解との共通點をいくつか取り上げたにとどまり、比較した圖解も少なかった。

そこで本論では、これまで取り上げなかったものを含め、現存する早期のものである宋代の圖解から、初めて勅撰の書物に附された圖解である明代の「詩經大全圖」までの各圖解について、編纂年代の順にその内容と特徴を整理し、『詩經』圖解の原型が出現し、「詩經大全圖」へと繼承されていった過程について考察する。

『詩經』圖解本には『詩經』の内容に對する、その時々に関

心や認識の有様が圖示されており、『詩經』註釋史において缺かすことのできない資料である。『詩經』圖解本が註釋として有する意義を明らかにする上で、その内容と變遷過程の整理は一つの手がかりになると考えられる。

一、現存する早期の『詩經』圖解

現存する早期の『詩經』圖解は、北宋期に一種、南宋期に四種類があり、推定される編纂年代の順に『鄭氏詩譜』、『毛詩正變指南圖』、『毛詩圖譜』、『毛詩圖說』、『毛詩舉要圖』となる。

編纂年代から見た場合、漢の鄭玄が編纂し、北宋の歐陽修が補訂した『鄭氏詩譜』は、現存する早期の圖解である。また内容面から見た場合、南宋の楊甲が編纂した「毛詩正變指南圖」は、多様な事物を収録した圖解としては早期のものである。そこで、以下ではまずこの二つの圖解の内容と特徴について述べる。

a. 後漢・鄭玄撰、北宋・歐陽修補訂『鄭氏詩譜』⁽²⁾

『鄭氏詩譜』は、「風」「雅」の各詩と、これらの詩が作られたとされる時代の周王、諸侯の名稱を對照させた一覽表である。後漢の鄭玄が編纂したとされるが、北宋の時にはほとん

『詩經』圖解本の變遷（原田）

ど伝わっていないかった。『鄭氏詩譜』を探し求めていた歐陽修は、慶曆四年（一〇四四）、絳州（現在の山西運城市）においてようやく入手したが、これは首尾は失われ誤字、錯簡が多かつたため、『春秋』や『史記』の本紀及び世家年表、「毛鄭之說」をもとに自らが編纂していた『詩圖』十四篇や孔穎達の疏などによって二百七文字を補い、八百八十三文字を修訂した。以上の経過は、現在傳わる『鄭氏詩譜』に附された「詩譜補亡後序」に記されている。このように、現在傳わる『鄭氏詩譜』の内容が成立したのは歐陽修以後である。

『詩經』圖解が漢代にすでに存在していたことは文献の記載にある。南北朝から唐代にかけても幾種かの圖解が作成され、北宋では眞宗が閲覽した『五經圖』があつたといふ⁽³⁾。しかし、『鄭氏詩譜』を除き、これら北宋以前の『詩經』圖解はいずれも後世に伝わったり、影響を與えたりした形跡がない。また、南宋以降には『鄭氏詩譜』を引用した『詩經』註釋書があることから、⁽⁴⁾『鄭氏詩譜』は現存する早期の『詩經』圖解というだけではなく、南宋以後、一般に廣く参照された圖解としても、ほぼ最初のものであつたといえよう。

b. 南宋・楊甲撰、毛邦翰等增補『六經圖』中の「毛詩正
變指南圖」(圖1)

『鄭氏詩譜』の後に編纂された「毛詩正變指南圖」(以下「指南圖」)は紹興年間(一一三一―一一六二)、昌元(現在の四川重慶市)の楊甲が編纂した『六經圖』中の圖解である。楊甲の經歷は明らかではない⁽⁵⁾。陳振孫『直齋書錄解題』や度正(一一六六―一二參五)の『性善堂稿』の記述によれば、南宋の中、後期になると『六經圖』は盛んに刊刻され良劣様々な版本が存在し、また石碑にも刻まれていたらしい⁽⁶⁾。

これらの版本や石碑はほとんどが散佚し、唯一早期の様子を伝えるのは、南宋の毛邦翰等が乾道元年(一一六五)に増補した版によつて明の萬曆四十三年(一六一五)吳繼仕が刊刻したものである。吳繼仕本は「摹刻」と稱しているが、實際は明朝體を用いた「翻刻」であるうえ、宋代の記載にある「指南圖」よりも圖が二つ少なく、必ずしも毛邦翰増補本の様子を完全に傳えているわけではない。しかし、『直齋書錄解題』などの記載によれば、毛邦翰等の増補は「指南圖」に及んでおらず、現存する吳繼仕本は、翻刻であり圖が少ないという先の二點を除けば、楊甲が編纂した當時の様子を概ね傳えていると言える⁽⁷⁾。

吳繼仕本によると、「指南圖」が収録する項目は次の表のようになる。

表一、「指南圖」収録項目⁽⁸⁾

b 1 詩篇名	b 2 作詩時	b 3 b 12 周、召、衛、齊、鄭、曹、陳、晉、秦、宋	b 13 族譜
世	世次		
b 14 十五國	b 15 十五國	b 16 日居月	b 17 公劉相
風譜	風地理圖	諸圖	陰陽圖
b 19 齊國風	b 20 大田雨	b 21 甫田歲	b 22 百夫之
挈壺氏圖	我公田圖	取十千圖	田
b 24 載芟藉	b 25 時邁巡	b 26 我將明	b 27 清廟閔
田圖	狩圖	堂圖	宮圖
b 29 斯干考	b 30 秦國風	b 31 商頌王	b 32 b 40 釋草、木、菜、穀、鳥、獸、蟲、魚、馬名
室圖	小戎圖	畿圖	
b 41 釋衣服	b 42 釋車馬	b 43 釋禮樂	b 44 釋兵農
制名	器名	器名	器名
			b 45 四詩傳
			授圖

表一にあるように、「指南圖」は地理から天文、時刻、土地や建築制度、器物などの諸事物を収録した総合的な圖解であ

る。このうち、項目名の末尾に「名」とあるb 32、b 44には圖がなく、事物の名稱のみが記されている。b 41、b 44についてはいずれも「已上形制並見二禮圖」とある。これは、『六經圖』の「周禮文物大全圖」や「禮記制度示掌圖」に、聶崇義『三禮圖』や陳祥道『禮書』などの圖を収録していることから省略したようだが、b 32、b 40については特に説明がない。また、圖の説明の多くは毛氏の傳、鄭玄の箋、孔穎達の疏を引用している。

圖の作成については、「指南圖」の編纂過程で他の圖解を参照したことが一部の圖から伺われる。例えば、表一の「齊國風挈壺氏圖」(b 19)には唐の呂才と北宋初期の燕肅が制作した二つの漏刻圖を引用したことを明示されている。また、圖中に明示されていないが、「我將明堂圖」(b 26)は聶崇義『三禮圖』の「明堂圖」と全く同じものである。このほか、「十五國風譜」(b 14)は『鄭氏詩譜』と同内容の圖である。『鄭氏詩譜』が「風」「雅」「頌」各項目の中で歴代の周王ごとに詩の篇名を列挙して分類しているのに對して、「十五國風譜」は國風の詩に限って詩の篇數のみを擧げており、兩圖は體裁が異なる。しかし、「十五國風譜」には「歐譜」を参照したとあり、末尾に附された「右自文王至頌王凡二十世、其可考者

『詩經』圖解本の變遷(原田)

陳齊衛晉曹鄭魏、此變風之先後也」の一文は、歐陽修「詩圖總序」の抜粹である。楊甲は歐陽修補訂の『鄭氏詩譜』をもとに「十五國風譜」を作成したと考えられる。このように、少なくとも楊甲は『詩經』や、その他の分野の圖解を複數参照し、あるいは引用して「指南圖」を編纂したようである。

また、表一にあるように、はじめに篇名、年代や家系に關する圖表があり、次に天文や地理、土地、祖廟、建築などの諸制度、そして最後に學問傳授の圖表を配置する形式は、『六經圖』中の「尚書軌範撮要圖」や「禮記制度示掌圖」と共通している。特に最後に「傳授圖」を置くのは、「大易象數鉤深圖」や「春秋筆削發微圖」、「周禮文物大全圖」の各圖でも同じである。理由は不明ながら、楊甲は『六經圖』の編纂にあたって一定の配列基準を考えており、それにしたがって「指南圖」も編纂したのであろう。

以上のように、北宋から南宋にかけて、一般に廣く普及し、参照された初期の『詩經』圖解は『鄭氏詩譜』であった。歐陽修が『詩圖』を編纂し、さらに『鄭氏詩譜』を補訂して鄭玄の説における詩の作成時期を表に整理したのは、作成時期とその當時の社會背景が詩の正變に關わる事柄だったからである。⁹⁾『鄭氏圖譜』は簡易な表だが、詩の意義を解釋する上で

重要なものであつた。

これに對して、楊甲が「指南圖」を編纂した理由は不明ながら、これを増補した毛邦翰、あるいは度正の記載によれば、諸生の教育が目的であつたと推測される⁽¹⁰⁾。そうであれば、「指南圖」は諸生により深く詩を學ばせるために、『鄭氏詩譜』のように詩の意義を知るための圖解とともに、詩を學ぶ上で知る必要のある制度や事物の圖を他書よりまとめ、あるいは作成したのであろう。

このように、『鄭氏詩譜』と「指南圖」は、單純なものから複雑なものへと「進化」したのではなく、もとより編纂意圖が異なつていた。そして、「指南圖」のように教育や學習を目的とした総合的な内容の圖解が編纂され、世に廣まつたことで、このあと同様の圖解が引き續き編纂されることになる。

二、書肆刊刻『詩經』圖解の形式と特徴

「指南圖」の後、少なくとも數十年を経て編纂された「毛詩圖譜」、「毛詩圖說」、「毛詩舉要圖」は、いずれも建安の書肆によつて編纂、刊刻されたと推定される圖解である。このうち、「毛詩圖譜」は『鄭氏詩譜』と同内容の表、「毛詩圖說」と「毛詩舉要圖」は「指南圖」と同じく多様の事物の圖を收

録した圖解である。

c. 南宋・建安書肆刊『監本纂圖重言重意互註點校毛詩』

卷頭の「毛詩圖譜」及び「四詩傳授之圖」(圖2)

「毛詩圖譜」(以下「圖譜」)は缺筆により孝宗の在位時(一一六二—一一八九)に書肆が刊刻した『監本纂圖重言重意互註點校毛詩』(以下『監本纂圖毛詩』)卷頭に附された圖解である⁽¹¹⁾。『監本纂圖毛詩』の版本は二つ現存しており、北京國家圖書館に全二十卷の完本と、十一卷の有缺本が所藏されている⁽¹²⁾。完本と有缺本は全く同じ内容だが、字樣、版式の細部が異なつた別版である。

「圖譜」は、先述の『鄭氏詩譜』(a)や「指南圖」(b)の「十五國風譜」(b14)と同じく、詩が作成された年代とその時の周王を對照させた一覽表である。ただし、『鄭氏詩譜』や「指南圖」は「風」「雅」「頌」の項目の中で詩の年代を歴代の周王ごとに分類しているが、「圖譜」は「文王」と「武王」、「惠襄之間」、「頃王」の四項目のみを立て、このなかで「風」「雅」「頌」の各詩を分類している。また、収録する詩も五十二篇とかなり省略されている。このような違いはあるが、「圖譜」の末尾にも「指南圖」と同じく「右自文王至頃王凡二十

世、其可考者陳齊衛晉曹鄭魏、此變風之先後也」の一文があり、書肆が「指南圖」を節略して作成したか、すでに節略された圖を収録した毛邦翰増補本以外に異本に基づいた可能性がある。

また、完本には、「圖譜」の次に「四詩傳授之圖」がある。「四詩傳授之圖」は魯、韓、齊、毛四家の系譜を前漢末期まで示した表であり、「指南圖」の「四詩傳授圖」(b 45)と同じものである。

二種類の『監本纂圖毛詩』に附された「圖譜」は、完本、有歛本のどちらにも末尾に「毛詩圖譜終」とあることから、他の圖が脱落したのではなく、元來「圖譜」だけが附されていたことがわかる。また完本の「四詩傳授之圖」は、「毛詩圖譜終」とある葉の次葉に配されていることから、まず有歛本のように「圖譜」のみを附した版が存在し、「四詩傳授之圖」を後から加えた版が刊刻されたのだろう。

『詩經』圖解の形式を考える上で興味深いのは、完本にある「圖譜」、「四詩傳授之圖」という順序である。わずかに二つの表ながら、それぞれ内容が共通する「指南圖」の「十五國風譜」(b 14)、「四詩傳授圖」(b 45)と同じ順序で配されている。前に述べたように、これは楊甲が『六經圖』編纂にあたり採つ

『詩經』圖解本の變遷(原田)

た配列方法であることから、書肆は『監本纂圖毛詩』を刊刻するにあたって、「指南圖」から必要な表を抜き出し、體裁を改めた上で「指南圖」の順に配したのかもしれない。そうだとすれば、書肆は「指南圖」を基準として、附録の圖解を編纂した可能性がある。

d. 南宋・建安書肆編「毛詩圖說」(圖3)

「圖譜」(c)と同年代には、同じく建安の書肆により巾箱本「毛詩圖說」(以下「圖說」)が刊刻された。⁽¹³⁾「圖說」は圖解のみが刊刻されたようで、「毛詩圖說」と「春秋圖說」の殘歛本が現存している。

「圖說」は殘卷だが、卷頭にある「毛詩圖總目」の項目名によれば、「指南圖」と同様に諸事物を圖示した総合的な圖解であつたことがわかる。

表二のなかで、圖表が現存するのはd 1、d 13、d 15、d 31である。「圖說」は「指南圖」(b)に見えない圖を多く収録し、圖表の配列も随分と異なる。しかし、「圖譜」には「指南圖」と同じく冒頭に「詩篇名」(d 1)、末尾の方に「詩傳授圖」(d 65)があるうえ、表中、網かけで記した項目のように、「指南圖」との共通性が考えられる項目も複数存在する。


中國文學研究 第三十八期

表二、「圖說」収録項目

(表中の項目名は「圖說」巻頭にある「毛詩圖録篇目」による。■は缺けて不明な文字。□は「指南圖」にも見える項目、丸括弧()内は現存する圖解での項目名、龜甲括弧〔 〕内は「指南圖」の内容と共通する項目番號。)

d 1 詩篇名(毛詩篇目)〔b 1〕	d 2 逸詩篇名	d 3 詩篇重名	d 4 國風周召譜〔b 14〕	d 5 國風邶鄘衛譜〔b 14〕
d 6 國風王鄭譜〔b 14〕	d 7 國風齊魏譜〔b 14〕	d 8 國風唐秦譜〔b 14〕	d 9 國風陳檜譜〔b 14〕	d 10 國風曹豳譜〔b 14〕
d 11 小雅正變譜	d 12 大雅正變譜	d 13 三頌之譜	d 14 歐陽詩說	d 15 ■■■(周召衛齊鄭曹陳晉秦宋)世次〔b 3〕〔b 12〕
d 16 族譜〔b 13〕	d 17 作詩時世圖〔b 2〕	d 18 十五國風地理圖〔b 15〕	d 19 十五國地名因革圖	d 20 大東總星圖
d 21 七月流火圖	d 22 三星在天圖	d 23 爾雅詩紀月圖	d 24 公劉度夕陽圖〔b 17〕	d 25 楚丘定星中圖〔b 18〕
d 26 挈壺圖〔b 19〕	d 27 后稷封部圖	d 28 公劉遷豳圖	d 29 太王胥宇圖	d 30 宣王考室圖〔b 29〕
d 31 文武豐鎬圖	d 32 成王守成圖	d 33 宣王復古圖	d 34 千旄美衛圖	d 35 駒頌僖公圖
d 36 藉田祈社稷圖	d 37 巡狩告祭柴望圖〔b 25〕	d 38 靈臺辟雍圖〔b 28〕	d 39 閔宮路寢圖	d 40 我將明堂圖〔b 26〕
d 41 魯國泮宮圖〔b 28〕	d 42 絲衣釋賓尸圖	d 43 有瞽始作樂圖	d 44 ■■■	d 45 秦小戎圖〔b 30〕
d 46 小戎■	d 47 甫田歲取十千圖〔b 21〕	d 48 大田雨我公田圖〔b 20〕	d 49 商頌邦畿圖〔b 31〕	d 50 商九■圖
d 51 朝服圖	d 52 后夫人婦人服圖	d 53 冠冕弁圖	d 54 帶佩芾圖	d 55 衣裳皮帛圖
d 56 祭天圖	d 57 樂舞器圖	d 58 器物圖	d 59 兵器圖	d 60 鄉飲登降笙歌圖
d 61 二禮歌詩總圖	d 62 季札觀歌圖	d 63 師乙宜歌圖	d 64 春秋賦詩圖	d 65 詩傳授圖〔b 45〕
d 66 〔d 75 釋草・菜・木・華果・禾・禽・獸・蟲・魚・馬名〕〔b 32〕〔b 40〕		d 76 車飾名		

現存しない d 31 以降の圖解については、「指南圖」と項目名が共通、あるいは類似するもののみ網かけにしてある。

共通性が伺われる項目のうち、圖が現存する「詩篇名（毛詩篇目）」（d 1）、「（周く宋）世次」（d 15）、「族譜」（d 16）、「十五國風地理圖」（d 18）は「指南圖」に同名の圖解がある。これらは、字様など僅かな差異を除けば、内容、形式ともに全く同一の圖である。

これに對して、d 4 s d 10 の各國「國風譜」及び「作詩時世圖」（d 17）、「公劉度夕陽圖」（d 24）、「楚丘定星中圖」（d 25）、「挈壺圖」（d 26）、「宣王考室圖」（d 30）は「指南圖」にもほぼ同名稱、同内容の圖解があるが、やや異なる。

例えば、「圖說」の d 4 s d 10 各國「國風譜」は「指南圖」の「十五國風譜」（b 14）や「圖譜」（c）に相當し、ともに歐陽修の『鄭氏詩譜』（a）にもとづく圖だが、「指南圖」では周王の名稱とその當時作成された詩篇數を羅列するだけなのに對し、「圖說」は周王と詩の篇名の關係を棒線によつて圖示し、さらに『毛詩正義』や『春秋』、『史記』年表、歐陽修の詩說を引用している。また、「公劉度夕陽圖」（d 24）や「楚丘定星中圖」（d 25）、「宣王考室圖」（d 30）では、「指南圖」にはない星座や建物の形狀を加えたり、『毛詩』の注や疏など

『詩經』圖解本の變遷（原田）

をもとに楊甲が記した解説を注や疏の原文に置き換えたりしている。このほか、「挈壺圖」（d 26）は「指南圖」の「齊國風挈壺氏圖」（b 19）が引く唐の呂才や北宋初期の燕肅の圖よりも新しい、北宋中期の陳祥道『禮書』の圖や北宋末期から南宋にかけての王普が作成した『蓮花漏圖』を収録している。唯一、「作詩時世圖」（d 17）のみは「指南圖」の「作詩時世」（b 2）よりも簡略化されており、「指南圖」にあつた詩篇名を省略し、篇數だけを列舉している。

以上の異同點からは、「圖說」が「指南圖」に依據して、數量面で大幅に圖を増補したのではなく、内容面でも視覺的に工夫したり、より新たな資料に差し替えたりといった變更を加えたことが伺われる。また、「圖說」は各國「國風譜」（d 4 s d 10）のように『鄭氏詩譜』との關連性から歐陽修の說を引用する圖解以外にも、獨立した項目として「歐陽詩說」（d 14）を収録している。この項目の圖は現存せず、その内容は不明だが、「圖說」はこれまでの圖解よりも歐陽修の論を特色として強調することを目的に編纂されたことが推測される。これは、筆者が管見した『詩經』圖解では、後にも先にも唯一のものである。

e. 南宋・建安書肆編『纂圖互註毛詩』の附録「毛詩舉要圖」(圖4)

紹熙年間(一一九〇〜一一九四)、「圖譜」(c)や「圖說」(d)と同じく建安の書肆によって編纂されたのが「毛詩舉要圖」(以下「舉要圖」)である。⁽¹⁴⁾これは二種類が現存している。一つは臺灣故宮博物院に所藏されている『纂圖互註毛詩』の巻頭に附された圖解であり、もう一つは靜嘉堂文庫にある圖解だけのものである。⁽¹⁵⁾兩者の内容は全く同じだが、字様、圖中の模様など細部が異なる別版である。

「舉要圖」の内容は「指南圖」と同じく諸事物に及び、圖の説明も毛傳、鄭箋、孔疏を主としている。「舉要圖」が収録する項目は次の表のとおりである。

表三、「舉要圖」収録項目

(圖の對應…「圖說」のみは■、「指南圖」と「圖說」の兩方は□。
括弧内の数字のうち上からbは「指南圖」、dは「圖說」に對應する項目番號。)

※表中の「秦小戎圖」(e 19)は、「指南圖」では「秦國風小戎圖」とあり「舉要圖」とは名稱が異なるが、実際には全く同じ圖であるため、「指南圖」、「圖說」ともに對應するものとした。また、「我將明

堂之圖」(e 15)と「器物之圖」(e 29)は「指南圖」や「圖說」と比べて「之」字が多いだけだが、「圖說」では散佚した箇所であり比較できないため、ここでは「舉要圖」にのみ見える項目として扱った。

e 1 十五國風地理圖 (b 15 / d 18)	e 2 大東總星之圖 (d 20)	e 3 公劉度夕陽圖 (d 17)	e 4 楚丘定星中圖 (d 18)	e 5 七月流火圖 (d 21)
e 6 三星在天圖 (d 22)	e 7 挈壺之圖 (d 26)	e 8 太王胥宇圖 (d 29)	e 9 宣王考室圖 (d 30)	e 10 文武鑄之圖 (d 31)
e 11 春耕田祈社稷圖 (d 36)	e 12 巡守柴望告祭圖 (d 37)	e 13 靈臺辟雍之圖 (d 38)	e 14 闕宮路寢之圖 (d 39)	e 15 我將明堂之圖
e 16 諸侯泮宮之圖	e 17 兵器之圖 (d 59)	e 18 周元戎圖	e 19 秦小戎圖 (b 30 / d 45)	e 20 有鼓始作樂圖 (d 43)
e 21 絲衣繹賓尸圖 (d 42)	e 22 朝服之圖 (d 51)	e 23 后夫人婦人之服圖 (d 52)	e 24 冠冕弁圖 (d 53)	e 25 帶佩圖 (d 54)
e 26 衣裘幣帛之圖 (d 55)	e 27 祭器之圖	e 28 樂舞器圖 (d 57)	e 29 器物之圖	e 30 四詩傳授之圖上、下 (d 65)

「舉要圖」にある圖は全三十項目であり、「指南圖」(b)の四十五項目や「圖說」(d)の七十六項目よりも少ない。このうち「指南圖」と「圖說」に共通するのは「十五國風地理圖」(e1)、「秦小戎圖」(e19)である。これ以外の、「舉要圖」のみに見える項目名を除くと、全體のほぼ八割にあたる二十三項目は「圖說」(d)のみと對應している。

項目名だけではなく、「舉要圖」と「圖說」は内容面でも共通する点が多い。例えば、「舉要圖」にある「大東總星之圖」(e2)、「七月流火圖」(e5)、「三星在天圖」(e6)、「太王胥宇圖」(e8)は「圖說」に初めて見える圖であり、「公劉度夕陽圖」(e3)や「楚丘定星中圖」(e4)、「挈壺之圖」(e7)は、「指南圖」にも類似した名稱の項目があるが、圖は「圖說」のものである。これらの圖解は、圖と解説のどちらも「圖說」と一字一句違わず全く同じものである。

また、項目の配列についても、表中の括弧内に示した「圖說」の項目番號からわかるように、「大東總星之圖」(e2)、「秦小戎圖」(e19)、「有鼓始作樂圖」(e20)の三箇所で「圖說」の順序とは前後する以外、すべて「圖說」の順序通りである。

以上に述べた項目名稱と内容、そして配列の共通性からは、「舉要圖」が現存する「圖說」か、あるいは「圖說」と同類の

圖解を底本としたことが推測される。

では、「舉要圖」が「圖說」と異なる点についてはどうか。「舉要圖」に初見の「周元戎圖」(e18)など一部の圖解については、「舉要圖」の編纂者が付け加えたものか、あるいは「舉要圖」が基づいた圖解が現存する「圖說」とはやや異なるものだったのか、明らかにしたい。

これに對して、「圖說」にあつて「舉要圖」には見えない項目には、少なくとも二つの特徴がある。一つは「圖說」冒頭にあるd15、d17の項目である。これらは詩の篇名や作成年代を示した圖であり、『詩經』の構成を把握し、詩序との關わりから各詩の意義を理解する上で、基礎的かつ重要な事柄である。これらの項目がないことで、「舉要圖」は『詩經』全體の意義や解釋よりも、名物や制度が主體の圖解となっている。

そして、もう一つは、散佚した「釋草・菜・木・華果・禾・禽・獸・蟲・魚・馬名」(d66、d75)と「車飾名」(d76)の項目である。これらの項目名はいずれも末尾に「名」とあり、「指南圖」にある同様の項目「釋草、木、菜、穀、鳥、獸、蟲、魚、馬名」(b32、b44)から推測するに、概ね數文字程度の簡単な説明のみで圖はなかったと推測される。圖もなく簡単な説明に終始するこれらの項目は、おそらく實際に圖を載

せた他の項目ほど重要視されなかつたのだろう。特に、『詩經』を學び解釋する上で古來より重要視されたd 66、d 75の動植物に關する項目がなくなつたことで、元代以後、「舉要圖」の影響を受けたと推測される圖解からは、次第に動植物に關する項目が見られなくなる。

以上のように、書肆が編纂した『詩經』圖解の狀況は、『鄭氏詩譜』(a)や「指南圖」(b)のような内容の圖解が南宋中期以後、書肆によつて改編され附録や單行の圖解として刊刻されたこと、そして、このような圖解が書肆によつてさらに増補、刪改され、新たな圖解が編纂されていった過程が示されている。この原因としては、おそらく單獨の圖解か、あるいは附録かという書物の形式や、當時の『詩經』における教育や學習のあり方が關わつているのかもしれない。先述した『鄭氏詩譜』と「指南圖」の關係のように、圖譜が簡單なものから複雑なものへと「進化」していたのではなく、その時々目的や需要によつて手を加えられ「變化」したのだと考えられる。

三、元代から明代初期にかけての『詩經』圖解


現存が確認される元代の『詩經』圖解は、ともに至正年間

(二三四一〜一三七〇)ころに建立された『六經圖碑』中の「詩經圖」と『詩集傳名物鈔音釋纂輯』卷頭に附された「詩傳圖」の二種類である。この後、「詩傳圖」に依據したのが明の永樂年間(一四〇三〜一四二四)、永樂帝の命により編纂された『詩經大全』の卷頭に附された「詩經大全圖」である。

f. 『六經圖碑』中の「詩經圖」(圖5)

『明一統志』卷五十一「廣信府」の條によると、『六經圖碑』は元の至正年間、盧天祥が信州に赴任し學校を興した際に建立した石碑である。¹⁶⁾これは既述した楊甲『六經圖』とよく似た名稱だが、兩者は全く別の圖解である。『六經圖碑』中の『詩經』に關する圖解は「詩經圖」と題されており、収録される項目は以下の表のとおりである。

表四、『六經圖碑』中の「詩經圖」収録項目

(圖の對應: 「指南圖」、「圖說」、「舉要圖」に對應するものは、、括弧内の數字のうち上からbは「指南圖」、dは「圖說」、eは「舉要圖」に對應する項目番號)

f 1 思無邪圖	f 2 七月流火之圖 (d 21 / e 5)	f 3 大東總星之圖 (d 20 / e 2)	f 4 楚丘定星中圖 (d 18 / e 4)	f 5 公劉相陰陽圖 (b 17)
f 6 四始圖	f 7 十五國風地理之圖 (b 15 / d 18 / e 1)	f 8 邨公七月風化之圖	f 9 十五國風 / 大小雅 / 三頌譜	f 10 詩有六意、三經三緯之圖
f 11 經緯總圖	f 12 經緯正變之圖	f 13 靈臺之圖 (d 38 ? / e 13)	f 14 辟雍之圖 (d 38 ? / e 13)	f 15 泮宮之圖 (d 41 ? / e 16)
f 16 皋門應門之圖	f 17 周元戎圖 (e 18)	f 18 秦小戎圖 (b 30 / d 45 ? / e 19)	f 19 公車千乘之圖	f 20 出車一成之圖
f 21 冠服俎豆圭璧之圖	f 22 樂器周車戈矛之圖	f 23 毛詩小序之圖	f 24 鳥獸草木之名 (b 32 / b 40 / d 66 / d 75 ?)	

※「詩經圖」と他の圖解との對應は項目名ではなく、實際の圖の類似性による。ただし「圖說」の散佚箇所との對應については、項目名による推測であり、項目番號の後ろに「？」をつけた。

表四にあるように、「詩經圖」が収録する項目のうち、四割強に相當する十一項目は「指南圖」(b)や「圖說」(d)、「舉

『詩經』圖解本の變遷 (原田)


要圖」(e)に對應する圖が確認できる。このなかで「指南圖」まで遡る圖は「十五國風地理之圖」(f 7)と「公劉相陰陽圖」(f 5)、「鳥獸草木之名」(f 24)の三圖であり、残りの八圖は「圖說」か「舉要圖」に収録されている。このように「詩經圖」には「指南圖」、「圖說」、「舉要圖」の圖が混在しており、南宋以來の『詩經』圖解の要素を受け継いだことは疑いない。

これ以外の約六割を占める圖は、南宋期の『詩經』圖解には見えない。この六割のなかの約六割にあたる「思無邪圖」(f 1)、「四始圖」(f 6)、「十五國風・大小雅・三頌譜」(f 9)、「詩有六意、三經三緯之圖」(f 10)、「經緯總圖」(f 11)、「經緯正變之圖」(f 12)、「毛詩小序之圖」(f 23)は、いずれも孔子の詩論や「風」・「雅」・「頌」、「正變」、「比」・「賦」・「興」といった、『詩經』の理論や意義の解釋を示した圖である。なかでも「思無邪圖」(f 1)や「經緯總圖」(f 11)にある説明はすべて朱熹『詩集傳』を引用しており、「詩經圖」が朱熹の詩說を主として編纂されたことがわかる。本圖解が南宋までの從來の圖解のように「毛詩」と稱さず「詩經圖」になっているのも、朱熹を中心とした宋代の學者が提起した新說を重視したからであろう。

9. 羅復『詩集傳名物鈔音釋纂輯』卷頭の「詩傳圖」(圖6)

元の羅復が編纂した『詩集傳名物鈔音釋纂輯』のうち、現存する早期の刊本である至正二十八年(一三六三)雙桂書堂重刊本の卷頭には、「詩傳圖」が附されている。⁽¹⁷⁾この刊本は「重刊」であることから、「詩傳圖」は至正二十八年よりも前には存在していたはずだが、現存は確認されていない。「詩傳圖」の項目は、次の表のとおりである。

表五、「詩傳圖」の収録項目

()は「指南圖」(b)、「圖說」(d)、「舉要圖」(e)と共通する圖。括弧内は『六經圖碑』の「詩經圖」にある對應項目。

g 1 思無邪圖 (f 1)	g 2 四始圖 (f 6)	g 3 正變風雅之圖 (f 12)	g 4 詩有六義之圖 (f 10)	g 5 十五國風地理之圖 (f 7)
g 6 靈臺圖 (f 13)	g 7 辟離圖 (f 14)	g 8 皋門應門圖 (f 16)	g 9 泮宮圖 (f 15)	g 10 大東總星之圖 (f 3)
g 11 七月流火之圖 (f 2)	g 12 楚丘定之方中圖 (f 4)	g 13 公劉相陰陽圖 (f 5)	g 14 豳公七月風化之圖 (f 8)	g 15 冠服圖 (f 21)
g 16 衣裳圖 (f 21)				

表五にあるように、「詩傳圖」(g)の項目順序は「思無邪圖」(g 1)が冒頭にある以外、「詩經圖」(f)とは全く異なる。また、「正變風雅之圖」(g 3)のように「詩經圖」とは名稱が異なる項目や、「冠服圖」(g 15)と「衣裳圖」(g 16)のように分類が異なる項目がある。このため、「詩傳圖」と「詩經圖」の間に直接的な関係性は見出し難い。

しかし、「詩傳圖」の圖自體は、すべて「詩經圖」と同一である。南宋期の圖解と共通する項目では、「指南圖」まで遡る圖は「十五國風地理之圖」(g 5)と「公劉相陰陽圖」(g 13)の二つであり、「詩經圖」よりも「鳥獸草木之名」(g 24)の一項目が少なく、大部分は「圖說」(d)や「舉要圖」(e)に見える圖である。

編纂者の羅復については、字が中行、廬陵の人という以外、詳細な経歴は伝わっておらず、しかも『詩集傳名物鈔音釋纂輯』に附された序や凡例は朱熹『詩集傳』のものだけであり、「詩傳圖」が附された経過は明らかではない。⁽¹⁸⁾ただし、次の「詩經大全圖」のところで述べるように、「詩經大全圖」の凡例からは、羅復が他書の圖を集めて「詩傳圖」を編纂したことが存在していたことが推測される。

h. 『詩經大全』卷頭の「詩經大全圖」

明の永樂帝の命により胡廣などが編纂し、永樂十三年（一四一五）に完成した『五經大全』中の『詩經大全』卷頭には「詩經大全圖」一卷が附されている。⁽¹⁹⁾「詩經大全圖」の項目は次の表のとおりである。

表六…「詩經大全圖」の収録項目

h 1 思無邪圖	h 2 四始圖	h 3 正變風雅之圖	h 4 詩有六義之圖	h 5 十五國風地理之圖
h 6 靈臺辟離之圖	h 7 皋門應門圖	h 8 泮宮圖	h 9 大東總星之圖	h 10 七月流火之圖
h 11 楚丘定之方中圖	h 12 公劉相陰陽圖	h 13 爾公七月風化之圖	h 14 冠服圖	h 15 衣裳圖
h 16 佩用之圖	h 17 禮器圖	h 18 樂器圖	h 19 雜器圖	h 20 車制之圖
h 21 周元戎圖	h 22 秦小戎圖	h 23 兵器服圖	h 24 諸國世次圖	h 25 作詩時世圖

(※) は「指南圖」(b)、「圖說」(d)、「舉要圖」(e)に既出の圖。
■ は元の「詩經圖」(f)、「詩傳圖」(g)以降に初めて見える圖

『詩經』圖解本の變遷(原田)

「詩經大全圖」の編纂については、『詩經大全』の凡例に「名物附圖、一依廬陵羅氏所集諸國世次及作詩世時圖、一依安城劉氏、存之以備觀覽」とあり、先述した羅復の「詩傳圖」(g)と、「安城劉氏」、すなわち元の劉瑾『詩集傳通釋』の圖解に基づいたという。これまで筆者は圖解の附された『詩集傳通釋』の存在を確認できていないが、「詩經大全圖」の圖は既述した「詩傳圖」(g)に見えるものである。

表の項目によると、「靈臺辟離之圖」(h 6)が一つの項目となつてゐる以外、「思無邪圖」(h 1)から「衣裳圖」(h 15)までは、項目の名稱、圖の内容ともに「詩傳圖」(g)と全く同じである。しかし、「詩經大全圖」のほうは「佩用之圖」(h 16)以降の圖が多い。このうち「諸國世次圖」(h 24)と「作詩世時圖」(h 25)は、『詩經大全』の凡例より羅復の「詩傳圖」に収録されていたことは明らかだが、既述した雙桂堂重刊本には見えないことから、明代には、先述した雙桂書堂重刊本よりも多くの圖を収録した「詩傳圖」が存在していたのだろう。

また、凡例には「廬陵羅氏所集諸國世次及作詩世時圖」とあることから、羅復は主に諸書の圖を採集したようである。先述した「詩傳圖」や「詩經大全圖」の内容を見る限り、羅

復の採集した圖は概ね「圖說」(d)、「舉要圖」(e)といった書肆刊本および『六經圖碑』の「詩經圖」(f)と同じ圖解である。「詩傳圖」がこれらの圖解から直接採集したのか、あるいは現存する以外の圖解から採集したかは不明だが、いずれにしても羅復が採集した圖は、南宋以來の圖解を繼承した圖であつた。⁽²⁰⁾

以上のように、元代以降編纂された『詩經』圖解には、南宋の諸圖解には見られなかつた、朱熹の詩說などを圖示した新たな圖解が収録された。しかし、いずれの圖解も、凡そ半數の圖は南宋の『詩經』圖解に由來しており、さらにこの大部分は、書肆が刊刻した圖解に由來していた。

そして明代になり、『詩經大全』が編纂され「詩經大全圖」が附された際、編纂者は羅復が採集した圖の由來を明らかにすることはなく、ほぼそのまま収録した。そもそも『詩經大全』自體、朱彝尊が「是書止抄襲安成劉瑾通釋一書、僅刪去數條。而劉本以詩小序隸各篇之下、是書則別爲一編、若似乎不同者。要之、當日元末嘗纂修也」と批判するように、劉瑾の『詩集傳通釋』をやや改めたものに過ぎなかつた。⁽²¹⁾明代は『明史』卷四十六の選舉志に「詩主朱子集傳」とあるように、永樂帝の時に科擧の科目として『詩經』は朱熹の『詩集傳』

を正統と定めたが、主として朱熹の詩說を圖示した圖解でさえあれば、その由來を問う必要はなかつたのであろう。

おわりに

本論で考察してきたように、現存する北宋の『鄭氏詩譜』から明代の「詩經大全圖」に至る繼承の過程では、南宋の楊甲が編纂した「指南圖」以後、これをもとに書肆は諸圖解を編纂したと推測されること、そして元代以降に出現した、朱熹の詩說を主體とする編纂者不明の圖解が『詩經』圖解全體の大部分を占めることが確認された。

このように「詩經大全圖」の圖の根據は曖昧である。だが、勅撰書である『詩經大全』に附されたことで、その後の『詩經』圖解に大きな影響を與えることになった。

例えば、明代では王逢輯、何英增釋『詩經疏義會通』や萬曆三十三年(一六〇五)の葉向高『葉太史參補古今大方詩經大全』十五卷が「詩經大全圖」をそのまま収録しており、清代でも康熙六十年(一七二二)王鴻緒等敕撰の『欽定詩經傳說彙纂』に附された「詩傳圖」は、凡例には明示されていないが、「詩經大全圖」と全く同じものである。これと前後して康熙二十三年(一六八四)に編纂された姜文燦、吳荃彙輯『詩經正

『詩經體註圖考』の圖解も「詩經大全圖」と同一であり、「詩經大全圖」か「欽定詩經傳說彙纂」のいずれかの「詩傳圖」から採ったものであろう。宣統三年（一九二二）に上海の書肆「章福記」が刊行した石印本『繪圖監本詩經』の圖解は、「監本」とあることからすれば、清代の『欽定詩經傳說彙纂』に依據したと思われるが、この石印本の圖解にも「詩經大全圖」の一部が収録されている。

もつとも、明代以降になると、萬曆四十五年（一六一七）に郭若維が翻刻した楊甲『六經圖』や、萬曆四十二年（一六一四）に盧謙が「六經圖碑」を校勘した『五經圖』、康熙四十八年（一七〇九）に江爲龍が「六經圖碑」に「四書」の圖解を附して編纂した『朱子六經圖』、乾隆九年（一七四四）に鄭之僑が「六經圖碑」を増補して編纂した『六經圖』など、楊甲の『六經圖』や元の「六經圖碑」に直接依據した圖解が刊刻されており、すべての圖解が「詩經大全圖」に依據したわけではない。また、乾隆三十六年（一七七一）に徐鼎が編纂した『毛詩名物圖說』のように動植物の圖解を主とした、南宋から「詩經大全圖」に至るまでの圖解との關連性が見出し難い『詩經』圖解も存在する。

『詩經』圖解本の變遷（原田）

このように、明清以降の『詩經』圖解は數量が多く、内容も多様、複雑である。だが、本論のなかで北宋から明代に至るまでの圖解の繼承關係を整理したことで、明清以降の『詩經』圖解を整理する手がかりが得られたと考えられる。

以上の結果をもとに、今後は明清以降編纂された『詩經』圖解の相互の關係や、さらには歴代の各圖解の變遷の背景についても整理し、考察を進めていきたい。

〔注〕

- (1) 「毛詩舉要圖」を對象とした考察については、「詩經註釋史」における「毛詩舉要圖」の意義（『日本中國學會報』第六十四集 二〇一二年）に記した。
- (2) 本論では王雲五主編『四部叢刊續編』（臺灣商務印書館 一九六六年）収録の上海潘氏滂喜齋（潘祖蔭）藏宋本『詩本義』にある『鄭氏詩譜』を用いた。
- (3) 漢代の『詩經』圖解については唐の張彥遠『歷代名畫記』卷四が引く『博物志』には、後漢の桓帝の時に劉褒という人物が『雲漢圖』と『北風圖』を描いたとある。南北朝から唐代までの圖解については『隋書』卷三十三「經籍志」に梁の『毛詩圖』三卷、『毛詩孔子經圖』十二卷、『毛詩古賢聖圖』二卷が見え、『太平廣記』の「程修己傳」には文宗が程修己に描かせた『毛詩圖』について、『新唐書』卷五十七の藝文志には『毛詩草

木蟲魚圖』二十卷の記載がある。北宋の眞宗が閲覽した『五經圖』は『玉海』卷二十七「觀書」に記載がある。

(4) 『鄭氏詩譜』を引用した南宋註釋には、他にも范處義『詩補傳』、楊簡『慈湖詩傳』、呂祖謙『呂氏家塾讀詩記讀書記』、林傳『毛詩講義』、段昌武『毛詩集解』、嚴粲『詩緝』、朱鑑『詩經遺說』、王應麟『詩地理考』などがある。

(5) 『直齋書錄解題』卷三には字が鼎卿、布衣とある。『玉海』卷四二「紹興六經圖」が引く「中興書目」も同じ。後世、乾道二年の進士とする文獻もあるが、『六經圖』の編纂者と同一人物かどうかは不詳。

(6) 度正『性善堂稿』（『景印文淵閣四庫全書』第一一七〇冊臺灣商務印書館）卷十三「涪州教授陳亨由墓誌銘」には陳亨由（？）一二〇九）が『六經圖』の石碑を建立した時の狀況として「好事者版行之、徧天下」や「遂搜訪善本、重加校正、仍命工筆札善圖畫者寫之、刻之石、以示學者」とあり、南宋のころ『六經圖』には良劣様々な版本が存在していたらしい。また陳振孫『直齋書錄解題』卷三によると、毛邦翰增補本以外にも葉仲堪重編本が存在していた。石刻については王象之『輿地碑記目』卷四に「在郡學。郡人楊甲鼎卿所著也」とある。

(7) 『直齋書錄解題』卷三「六經圖」には「昌州布衣楊甲鼎卿所撰、撫州教授毛邦翰復增補之：詩四十七、今同」とある。

(8) 中國北京首都圖書館藏の吳繼仕重刻『六經圖』影印本（學苑出版社、一九九七年）を用いた。

(9) 歐陽修「詩圖總序」（『鄭氏詩譜』に附されている）は、全體

にわたって作成年代と正變の關係についての持論が述べられている。また「詩譜補亡後序」には「予疑毛鄭之失既多、然不敢輕爲改易之、意其爲說不止於箋傳而已。恨不得盡見二家之書」とあり、鄭玄の箋に對する疑問も『鄭氏詩譜』に關心を抱いた動機であった。

(10) 先述「詩經註釋史における「毛詩舉要圖」の意義」の「三、『詩經』註釋としての用途と意義」にある「a. 科舉受験」（『日本中國學會報』第六十四集、一四九頁）を參照。

(11) 李致忠『宋版書敘錄』（北京圖書館出版社、一九九七年）七〇七〜八十四頁には缺筆等、同書の詳細な紹介があり、本論はこれによった。

(12) 殘卷の藏書番號は「〇七九一六」、完本は「〇七九一七」。

(13) 「圖說」の藏書番號は「平圖〇〇〇七五二—〇〇〇七五五」。阿部隆一『中國訪書志』（汲古書院、一九七六年）の「第四篇北平圖書館原藏宋金元版經部解題」二十〜二十一頁に解題があり、缺筆が光宗（一一八九〜一一九四）に及ばないことを指摘している。

(14) 現在臺灣故宮博物院に所藏されている。阿部隆一『中國訪書志』の『中華民國國立故宮博物院北平圖書館宋金元版解題』九頁に缺筆の狀況が記されており、年代はこれによる。

(15) 靜嘉堂文庫藏本については『靜嘉堂文庫宋元版圖錄・解題篇』（汲古書院、一九九二年）三頁に解題がある。

(16) 「六經圖碑」の原碑は殘缺が現存しているようだが、筆者は實見していない。また、拓本は複數存在しており、本論では北京

大學圖書館藏清拓本（書號：B3521）を用いた。「六經圖碑」の建立については『明一統志』卷五十一「廣信府・名宦」の「盧天祥」條に「至元中、守信州、興學校。崇詩書、延儒生論理、致刻六經圖於石立兩廡下」とある。

(17) 『中華再造善本』（北京圖書館出版社、二〇〇六年）を用いた。原書は北京國家圖書館の所藏、藏書番號は「〇三三五五」。

(18) 羅復については朱彝尊『經義考』が引く黃虞稷の語による。

(19) 宮内廳所藏の永樂年間刊本（請求番號四五〇函六號）によった。

(20) 唯一、「詩傳圖」や「詩經大全圖」が圖の原典を示しているのは「公劉相陰陽圖」（g13およびh12）である。この圖には「今得西山眞先生儒家武庫所著公劉相陰陽圖。謹按其式作圖如上、以備讀詩者考焉」とあり、羅復が眞德秀（一一七八〜一二三五）の作成した「公劉相陰陽圖」をもとに圖を作成したことがわかる。ただし、「詩傳圖」等の圖は、説明が省略されているが「指南圖」と全く同一の圖である。「指南圖」は眞德秀が生まれる前の紹興年間（一一三一〜一一六二）には編纂されているので、眞德秀は「指南圖」を参照していた可能性がある。

(21) 『經義考』卷一一二「胡氏廣四書大全」の條による。

※本稿は、平成二十四年度早稻田大學特定課題研究助成費による研究成果の一部である。

* *

『詩經』圖解本の變遷（原田）

作者：原田信

Author: Harada Makoto

標題：有關《詩經》圖解本的變遷過程——以宋及明初爲中心

Title: Alterations of Illustrating Books on *Shi Jing* "詩經" : in the Dynasties from Song 宋 to Early Ming 明

摘要：關於《詩經》的內容，自古以來就有多種的注釋。這些注釋中有些是以文字記述的，也有些是通過圖解來表示的。但是迄今爲止有關圖解幾乎都沒有被提及過。因此，本論以《詩經》注釋史中圖解本的意義作爲考察的線索，通過對現存宋代至明代的《詩經》圖解本的梳理，對這些圖解本內容的特徵以及變遷的過程，還有圖解本與圖解本之間的關係加以論述。通過論述考察，可以清楚的了解到《詩經》圖解經歷了從毛傳、鄭箋的漢代注釋爲主的內容到採用朱熹等宋代學者的學說的過程，以及宋代以後由個人或者書肆所編纂的圖解匯集成了明代初期的《詩經大全圖》的過程。

關鍵詞：詩經 插圖 科舉 坊刻本 名物

圖1 「毛詩正變指南圖」

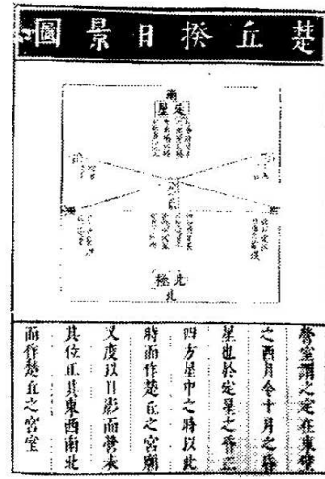


圖3 「毛詩圖說」

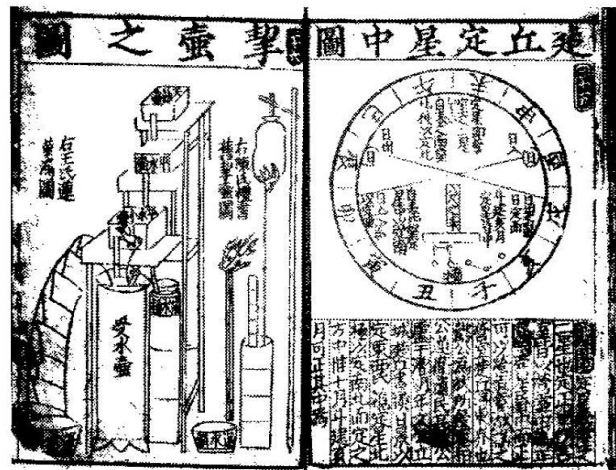


圖4 「毛詩舉要圖」



圖6 「詩傳圖」



圖5 「詩經圖」

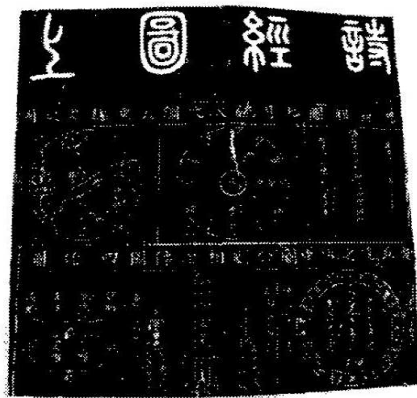


圖6 「詩傳圖」



圖2 「毛詩圖譜」與「四詩傳授之圖」

